

市長賞  
最優秀

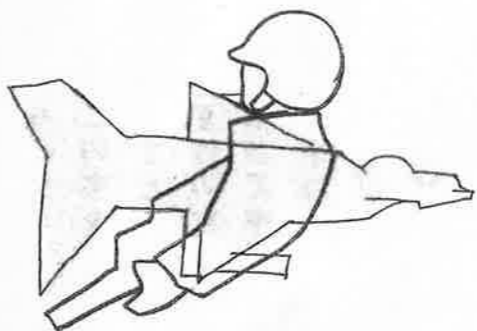


## 私の当たり前は世界の当たり前ではない

美しが丘西小学校 六年 山口萌菜

書名 はるかなるアフガニスタン  
著者 アンドリュー・クレメンツ作  
田中奈津子訳  
発行所 講談社

はるかなるアフガニスタン。私にとってのアフガニスタンは、「はるか」どころか宇宙のかなたのように遠い存在だった。テレビや新聞で見て知ってはいたが、私とは何も関係のないことだと思っていた。



アメリカに住むアビー・カーソンとアフガニスタンに住むサディード・バヤトは、アビーの学校の特別課題として文通を始める。私は文通をさほどおごことだとは思わなかったが、アメリカの女子とアフガニスタンの男子が文通するには、目に見えない障害があるようだ。複雑な事情がすぐに理解できなかったので、本やインターネットで調べてみた。アメリカはアフガニスタンに軍隊を送り、アフガニスタンのタリバンと度々激しい戦闘をおこなっている。二〇一一年に紛争の犠牲となった民間人は、過去五年間で最高の三〇一人にのぼるなど、人々の生活は厳しさを増しているそう。アメリカとアフガニスタンは難しい関係だった。私が最もしよう撃を受けたのは、アフガニスタンでは女子は教育を受けてはいけないとい

う考えた。信じられなかった。日本では女子も勉強できるのが当たり前で、そのことを考える必要すらない。私にとっては当り前のことを、保障されていない国がある。当たり前とは何か。考えれば考えるほど難しい問題だった。

アフガニスタンのことをもっと知りたいと思い、私は「絵本を届ける運動」に参加した。この活動は、本が不足する国の子どもたちへ、現地の言語に直した絵本を届けるボランティア活動だ。日本語で書かれた絵本にアフガニスタンの公用語の一つであるパシュトゥン語の翻訳シールをはる。パシュトゥン語は右から左の横書きで文字を書くため、左から書き始める日本語の文章をうまくかくすように工夫した。どんな人がこの本を読むのかとあれこれ想像しながら作業し、一時間足らずで完成した。こんな簡単な作業ではあるが、遠い存在だったアフガニスタンへ、私が自ら一歩踏み出した瞬間だった。それと同時に、自由に本を読める幸せ、女子でも学べる幸せを初めて感じた。

自分にとっての当たり前は、世界の当たり前とは限らない。アビーが退屈と感じていたトウモロコシ畑を美しいと感じるようになったように、自分の当たり前とは違う世界にふれることで、自分の世界が違って見えることもある。山に対して必ずしも肯定的ではなかったサディードが、アビーと出会ったことで、もっと高い山に挑戦しようとしている気持ちがある。私にはよく分かる。私も学べる幸せに感謝しながら一生けん命勉強をがんばり、小学校最後の一年間を充実したものにしたいと思う。また、相手にとっての当たり前は何なのかをよく聞き、自分にとっての当たり前を相手に押しつけるようなことはせず、おたがいに理解しあえるように努力する姿勢を忘れないように心がけていきたい。

